特250
676

一宮城誌

一宮保勝會發行

始

特250
676

序文

予ノ少年時代郷里ニアリシ頃我一宮城ニツキ古老ヨリ屢々昔譚的ノ口碑ヲ聽キ又時々此山ニ登リ本丸初メ各出丸ノ址ヲ馳驅シテハ雄ヲ阿波一國ニ振ヒ殊ニ長曾我部軍ノ攻圍ニ對シ能ク之ヲ堅守シタル城將ノ勇武下其キ實ニ難攻ノ要害堅固ナル城壘タリシコトヲ小供心ニモ之ヲ追慕シテ我一宮ノ大ナル誇トシアリシナリ然ルニ予ノ郷里ヲ出テゾヨリ今ヤ將ニ五十年今回圖ラスモ我後進ノ田村氏ニヨリ此城誌ヲ編纂セラレ其序文ヲ求メラル茲ニ於テ其稿ヲ閲讀スル少年時代ノ常時ノ記臆ヲ更ニ喚起シテ趣味律々タルヲ覺エルナリ散逸亡失サントスル誌科ヲ蒐集セラレ我郷土誌ヲ完成セラレタル同氏ノ勞苦ヲ忍ヒ敬意ヲ表スルニ吝ナラサルナリ

然リ而シテ今ヤ此城誌成ルヤ從來一宮城ヲ訪フ幾多ノ人士學生生徒ニシテ折角現地ニ臨ムモ未タ十分其史實ヲ知ルヲ得スシテ隔靴掻痒ノ感アリシ不便ヲ醫スルハ勿論同城址ノ由緒ヲ江湖ニ紹介シ併セテ郷土教育ニ大ニ資スル所アルベキト信ス茲ニ聊カ所感ヲ述ヘ以テ之カ序トス

昭和十二年陽春

陸軍中將　圓藤作藏

昭和十二年　帝國圖書館

焼麥をさがす古城や春の風　枝秋

囀りや一畦二十五万石　大烏

その昔松には問へと月朧　松翠

杜鵑一聲けろりと松に殘る月

殘壘に燃ゆる恨をからむ蔦

城台に更け行く月や木兎の聲

明神丸神ませし峰や松吹く風光る

倉庫跡落城の昔探るや燻け麥

竈床跡今日も亦芽狩り來てか山煙る

水の手跡（隱瀧）其の余り音も隱れて落つる瀧

はしがき

王政復古の先驅たりし一宮城主一宮氏の英勇を永久に顯彰すると共に彼の天嶮を巧妙に取入れ難攻不落の一宮城は南海の英雄長曾我部氏も城主を外に誘殺の外なく蜂須賀氏も德島城を襲はるゝ際は一宮城に退いて備へんとせし名城を紹介且つ保存を企つるため保勝會を起し其緒に就かんとするにあたり必要に迫られて茲に一宮城誌と題し由緒ある附近の一宮神社初め各史蹟名勝をも併せて發表するに編者が斯道に拙なきを憾みとし識者の指導を待て他日再版に完成せんものとし茲に短片の一冊子として表はした次第であります

終に城誌の研究に先年一宮校長たりし斯界の權威者田所眉東先生が努力せられたことを感謝します

城南

一宮城誌

一宮城は名東郡上八万村一宮にあり城は本丸明神の丸才藏の丸水の手の丸椎の丸小倉の丸の六壘より成り山城に屬す

山城とは山頂を平坦にして城を築き尾根に續く所々に塹濠即ち空濠を作る平坦部を里城と云ふ

口碑には十三の丸又は七つの丸とも言ひ今殘るは北城の牙城なりとも言ふ城下に本町西町横町北町船戸町下町等の地名は其昔を物語れるものなり此城は楠正成が雲霞の如き足利勢を惱ませし千早城に匹敵せる名城は今尚ほ傳へらるゝ所なり

一宮の地を大古から說けば日本書記古事記等に伊弉諾伊弉の二尊命に從ひて先づ淡路島を產み次に九州本州等而して粟の國を大宜都比賣と曰ひ又首長の名となりしか（神話）粟の國は阿波郡麻植郡名東郡名西郡ならん大化の頃より阿波の國と曰ふ長の國は那賀郡海部郡勝浦郡を曰ふか亦た舊事本紀皇孫本紀の成務天皇の條「阿波の君」は名方郡「名東名西」息長田別命（オキナガタワク）と說明せしものもある

寬平八年九月五日名方郡を別ちて名東、名西の二郡となすは藤原氏時代以西、名東郡の稱あり寬文四年以降名東、名西の二郡となしたるは明かなり

地方鄉名抄埴生（ハニウ）入田—神領八萬（ハヂマ）一宮—津田殖栗（エグリ）一宮—岩延

一宮城の地を太粟筋と云ふ太粟筋は太粟山（上分上山一宮間にして神領を中心）に屬す太粟上山下山に別つ萬葉集には八倉と鄉とも言ふ「雲のゐる八倉の鄉の喜延山下津岩根に宮居そめつも」今の氣延山

（木戸山）喜濃延は太粟の別名にして矢野村は名方郡所屬にして宇多天皇の寬平八年前述名東、名西の間に以西郡を置く

丹波の國北桑田郡大悲山峰定等の鐘に阿波國以西郡八万金剛寺鐘云々永仁四年とあり

伏見天皇御宇鎌倉時代に一宮は以西郡に屬せしも寬文四年幕命にて名東郡に合併別ちて上一宮下一宮とし一宮は下一宮のことなり亦一宮地方名を神領村鬼籠野村一宮村を合併して一宮領と言ひ古來神祿地なり

一宮城を語るに先つ一宮神社を述へむ一宮神社は其昔城山の明神の丸に鎭座せしを今の所に遷せり鄉社にして大宜都比賣命を祭神とす氏子は一宮下町入田廣野に及ぼせり平安朝初期の作と言ふ御神像あり延喜式明帳に名方郡中式內九座の一大社とあり社格は王朝神代國司が管內神社の參拜を省きて一二社を拜するに起る後鳥羽天皇元曆二年正一位に進み正一位一宮大明神と敬稱のあり

天保風土記回在錄寬政五年名東郡風土記草稿に大宜都比賣は鹿に召して伊豫の三島大山祇神の夫神に通ふ途中高越山其通路を妨け時々石合戰あり昔一宮と川田村は結婚せずとの傳說を載せたり

一宮城主は一宮大宮司長門守成助にして其系譜は小笠原長宗——長房——長義——賈久——長康——頼久——成宗——成直——成實——成祐——光孝——成時にして成祐は天正十年十一月七日夷山に討死す

神領村にある上一宮神社即ち太粟神社の太粟姫命神領村へ御降臨此地に粟を蒔き初むこの上一宮神社と

下一宮神社即ち一宮神社は最も關係あり

一宮城主は吉野朝廷に純忠を捧けたる阿波山嶽武士の勳しとして其勤王方の誇とせられこの英雄を永久に顯彰せむと一宮保勝會勃然起れる所なり

昔時一宮神社の祭典は國中神社の祭典と共に嚴肅なるものにして祭馬には侍が烏帽子長袴に齒を染め鞍馬を銜り亦流鏑馬（やぶさめ）等の行事あり今の一宮舊宇裝束の地は其時の遺名なりと亦近代まで國主の崇拜する所あり祭典終了の時など早鞭の馬にて國主に言上する例あり亦城下の地勢の變動には舟戸川と清水磧の突當の河底に石段の跡等あるは昔時の乘船場を物語れるものなりと

今城主を說くにあたり阿波の國司の變遷を述ふれば

鎌倉時代粟の守護職は佐々木氏小笠原氏

南北朝足利時代守護（守）細川氏

安土桃山時代　三好氏（小笠原氏子孫）

德川時代　蜂須賀氏

源頼朝が諸國に守護職を設くるにあたり佐々木經高が阿波土佐淡路の守護に補せられ白鳥城に居を定む小笠原成清に亡され佐々木の一族高範高常は鬼籠野村弓折に逃れ自殺す成清は三好郡池田の大西城に居館南北朝の頃長宗は亂世に乘し神領村太粟の祭官國造家を亡ぼし一宮氏を冒して大宮司となり成宗一宮に城を築く

高經守護職を罷められ信濃人小笠原長經四國守護となり三好郡大西城居城治世百年吉野朝時代武家方

の將細川定禪先づ讃岐に來り延曆二年春細川頼春定禪の後を嗣ぎ四國の兵力を統一せんとし阿波に入る小笠原の一族に爭論あり宮方に屬せしが頼春阿波宮方に對して第一攻擊の的當は一宮城小笠原宮內大輔であつて再起する能はす上郡の宮方に依りて辛して支へしも正平六年遂に一宮城も細川氏の配下に從ふ餘義なきに至つた

天正三年秋土佐の長曾我部元親は甲浦方面より侵入し桑野城主東條關之兵衞を結婚政策によりて我黨のものとし三好長治の政事振はさるをこととし平常長治と意見を異にせる同腹の兄細川掃部頭直之は天正四年十二月窃かに勝瑞を出で福良出羽守を頼み勝浦郡飯谷に逃がれ出羽守爲に仁宇山に障壁を構へ細川氏の舊臣を以て之を守らしめたるが五年三月長治安からす荒田野に進軍折柄成助伊澤越中守頼俊長治に背き兵を歸して其後を襲ふ遂に支ふる能はす今切城に逃れたり成助頼俊直ちに直之を大將として來り攻む遂に追はれて別宮浦に討死す成助頼俊に對する長治の臣下の六條附近の復讐戰に大兵を擧けしも頼俊の戰死を聞き成助兵を返し茲に於て長曾我部元親に好みを通し天正五年元親大西城を略し依て成助弟主計頭成時と兵を率ひて高崎に出陣せし此夏三好勢兵に南方桑野を回復せられ其後阿波紀伊の七千の大兵に一宮城攻擊せられ成助三ケ年間燒山寺に走る天正九年長治の弟三好存保勝瑞に歸る間もなく大兵を以て一宮城を圍む元親久武彦七郎親秋に二万の軍兵を付し馳せ成助を救ふ親秋一宮城に入り壘廓を增築し歸る天正十一年有名なる中富川合戰を終り阿波一圓は元親の有となつた亦永祿三年三好長慶紀州を討伐せしとき成助は阿波兵衞篠原左近伊澤越前守大西出雲守等七千の軍兵を以て實休の下に屬し實休戰死

苦戰のことあり亦永祿八年足利將軍義輝薨去と共に勝瑞城の三好氏那賀郡平島公方義親を奉して將軍となさんとせしも信長のため振はす義親撫養に死し三好の臣松永禪正久秀成助を立て將軍とせんとせしこともあり富岡城主新開遠江守道喜義輝の弟義助も成助の間和解信長義輝を將軍とせしかば全く和睦とな

つた

信長四國征伐を企て三好山城守入道笑嚴は其手先として阿波に歸り成助等を加擔させ一方元親は阿讃豫の三國返上を通せしもこれに從はす遂に畿内六万の軍兵にて嗚呼元親十年の苦心も二ヶ月にして水泡に歸せり

是より先弘仁四年四月芝原城主久米安藝守義弘佐野丹波守（佐野須賀）野口内藏助（上八万）仁木日向守（上八万）小倉佐助（藏本）等のため襲撃せられ苦戰成助の妻女は敵に捕はれしことあり

長曾我部元親は成助が三好山城守笑嚴に應せしの嫌ひあり天正十年十一月元親のため下八万夷山に誘殺せらる成助の所領名東名西両郡にして世々一宮明神の神官を兼ねたり成助の廟は今の若宮神社と言ひ一宮神社境内にあるまた一宮氏の墓は入田村海見の長樂寺内にありしと云ふも其寺の廢滅のため現存せす成助の死後は一宮北城に江村孫左工門南城に谷忠兵衞を置けり

豊臣秀吉四國征伐に一宮城の落城せしは秀長を將とする七萬の軍勢のため國中第二の要害の城も土佐の軍兵も遂には芝原城主久米義廣の子義昌の言に依る水の手の功落しと明石將監の一隊にて城後の樋道を斷たれたるため城内大に窮し終に開城の餘義なきに至る時に天正十三年六月なりき其年蜂須賀正勝家

政は功により阿波を領し一宮城に入る三世至鎭は此城に生る天正十四年城を德島に遷す寛永十四年一國一城の令出するまで益田氏城番となり兵三百を備へたり天正十九年蜂須賀氏に淡路一圓を加增せらる寛永十四年廢城阿波八城即ち一宮、川島、仁宇谷、脇町、撫養、池田大西、鞆城、富岡城なりき

最近には明治二年松平阿波守（舊石二十四万八千余石）封土版籍奉還德島藩となる明治四年七月德島藩を廢して德島縣を置き阿淡を管轄す十一月十五日名東縣（二十五万六千余石）六年二月二十日讃岐國（舊石二十八万八千余石）明治八年九月五日香川縣を置く明治九年八月一日高知縣となり淡路を兵庫縣へ（仝年十月六日德島支廳仝十三年三月二日德島縣となり今日に至る

一國一城の制と共に木石は德島城に運はれ今一宮城趾は北殿の牙城の趾のみと傳ふ今の寄大明は昔古城に祀りしもの落城後今の所に寄せ成助居城の鎭守祇園牛頭天皇豊玉姫命大巳貴命大麻彦命の相殿を寄せ寄大明神と號し奉る此邊に殿井と言ふ地あり昔丈六寺の方丈は此北城の本殿なりしと傳ふるものあり城の德島に遷ると共に入田村にありし市の縣社春日神社建治山の藥師は大瀧山に遷されたものである

城趾に伴ふ餘聞

城趾の北中腹に昔の倉庫趾なりし地あり燒麥と稱し諸穀の燒炭其原形の儘存す長曾我部氏の兵火に罹り兵糧米の燒けたるものと言ふも豊臣氏の攻擊の際の燒火せるが本當らしし

城の南麓赤坂の地に忌串と言ふものあり忌串は忌串塚土盛塚石盛塚等の一にて戰死者の合葬の地なりと

一宮城の後の餘聞に芭蕉の妻壽貞は芭蕉が尚ほ伊賀國上野城主藤堂家に仕へ松尾忠左衛門宗房と言ひし頃京都に阿波一宮氏壽貞を妾として年二十三脈世して京都に行き北村季吟の門に入る離別したるも老後に書信の往來あり壽貞との間に一子次郎兵衛ありと壽貞は一宮城主の後裔なり（佐世中山集淺生庵雜記）其壽貞の俳句「前世の我子に迷ふ稚子櫻」等數首あり因に豊臣勢の攻圍に方り藤堂氏の受持は下町にして或は芭蕉も領袖として來たものか

一宮城南手に城主の姫君が金の鶏を抱へて身を井戸に投せりと元朝此鶏が鳴く此様な傳説は他の城にも聞く最近石井町德藏寺内に一宮氏の純忠碑を專門家の人の發見せらるゝ所あり

附近小誌

大日寺四國十三番靈場十一面觀世音を本尊として弘法大師の開基なり大日寺は元船戸の船盡社の別當であつた元文二年法印律師の再建になる一宮神社の別當は神宮寺なりしも廢寺と共に今の所に遷され以來大日寺が別當となつた詠歌に阿波の國一の宮とは内ひたすきかけてたのめよ此代後の世入田村建治寺は大日寺の奥の院なりと

谷又八幡神社白鳥城主佐々木經高二男兼高は小笠原氏の攻勢に支ふる能はす弓折の地に逃れ自殺弟秀經は兄の遺志によりて同地に歸農鶴が岡八幡宮の分靈を此地に祀り其時の奉鏡は今尚ほ寶物として現存せり慶長十六年佐々木六右衛今の所に神殿を造營せるものなりと

谷又の元日の餅搗きは前述佐々木氏の自殺不幸が舊節季のことが不吉とて今に尚ほ元朝に餅搗行事となれり

村社國中神社は祭神罔象女神（ミツハノメノカミ）にして本社は平安朝以前の御鎭座に屬し古くより或は某々延喜式内社に擬せらる祭神については諸種の異説ありと雖も往古より一宮下町入田廣野四ヶ村の氏神たり創始當時は一宮宇和山長原にあり後世同村字裝束（舊檢地帳字名宮の本）に遷されしがその後天正十三年兵火に罹かり社殿全部燒亡したるにより假に現地字前山に御遷座あり今日に至る初め社殿兵火に罹るや豊家より御劍御馬を奉納して之を謝すと今目錄のみ存す本社藏古神像は平安朝期の作にかかり稀有の逸品にして亦その創立の古きを語る有力なる証據たり

國中寺享保十五年の建設にして阿彌陀如來を尊置す

伏拜神社は下町にあり應神天皇を祀る亦八幡祠とも云ふ寶暦三年改築義經が阿津伊越を通過し茲に鏑矢を納め武運長久を祈れりと

船盡祠船戸にあり石楠神社又名天神船神とも言ふ貞觀十四年從五位を授かる一宮明神の御弟分の神なりと傳ふ痛足の人草靴を獻し祈願せる古事あり

可兒清十の墓は一宮にありと源成助に仕へ其子福島正則に仕ふ關ヶ原の役に從へりと曰ふ

山神社は大山祇命を祀り赤坂に鎭座せり一宮神社と關係ある神社にして伊豫三島の大山祇命の神社と由緒を持つ

僧都淵は大僧都良弘の居住せし所なりと言ふ
大麻彦祠富田浦彌吉明神は彌吉と曰ふ人一宮より富田浦に遷せりと傳ふ
古寺廢寺一宮には天通、長樂、福成、阿明・千光、正明寺下町には觀音寺等があつた
經筒一宮神宮寺跡より發掘今は東京の博物館に納まつてある
谷又千光寺跡の板碑は我國最も古きものにて有名である

上八万の史蹟

上八万には小城の跡數々あり今は其跡を見るへきものなきも英城は仁木日向守高將の固めたる壘なり
鬼神嶽壘又猪飼城とも曰ふ戰國時代源吉清の據る所なり
山上城は野田采女正
宅宮壘は河内駿河守主將として居城
野田上壘野田采女の弟内藏助の居城
御所の内は貞觀年間安壘粟磨の居住せし所なりと
宅宮神社は大年大神大苦邊命を祀る最近鄕社に列せらる仝社の夏祭の踊は古有のものにして現存國寶的のものである上八万の神社としては天皇神社は西地にあり素盞嗚命を祈る其他に龍王神社諏訪神社朝

宮神社地神社天皇亦地神社がある
金剛寺跡昔金剛山一名寺山と曰ふ千餘年前の開基長會我部の兵火に罹れり
西願寺圓光寺あり阿彌陀如來を祀る四門寺は藥師如來にして近年成田の不動尊の分靈を遷せり此外に
西光寺慈音寺あり

上八万村近代史

文化十年公儀御高一宮千七百十九石余下町二百十石余上八万千九百四十五石余（阿波國村々御高都帳ニヨル）
昭和十一年全村九百七十四戸人口五千百六人土地一方里二にして田二百七十町畑百六町山林原野八百五十町宅地三十四町あり
維新當時一宮は名東郡第一大區第十二小區「矢野延命下町を合して」上八万は其第十三小區「佐那河内上下を合して」この二つを合併して今日の上八万村となつた
學校は上八万には星河内寺小屋原田喜三郎挾間の正木儀十郎川西の西野左内等があり明治六年惜陰小學校が出來一時挾間西地に分教場があつた一宮には關弘齋關策眠若林清平笠原集元田村亟平鹿野に飛鳥氏等後に關弘齋家塾より明治九年四月十一日清白學舍跡に一宮小學校を設けあり近代に至つて上八万一宮両校が今の所に移轉高等小學は一時上八万校のみなりしが両校に別るゝに至つた

警察は明治八年國中寺に屯所十四年分署二十九年交番三十年派出所三十二年一宮上八万両駐在所を置かれた

郵便局は一宮郵便局を明治十八年一宮に置かれ後更に上八万郵便局の増設となつた

消防組は上八万は大木社義勇社一宮は明治四十四年一宮消防組ありしが統一して八部制として現在の上八万村消防組となつた

招魂碑は昭和六年の建設に成れり祀らるゝ英靈は

西南役　由良新藏日開孫吉の陸軍二等兵

日清役　二木文藏一等兵三等書記の野口嘉藏二等兵三室哉次郎

日露役　歩兵上等兵藤井寅吉海軍一等水兵日開友三郎歩兵一等兵森虎市武市進之亟工兵上等兵長谷部義平歩兵上等兵由良儀一谷雪藏歩兵上等兵藤高勝太郎歩兵曹長森角次歩兵上等兵折口福太郎町田國太郎井貝金八歩兵一等兵溝杭又五郎上等兵河野卯平二等兵松山極吉伍長佐々木次郎左工門砲兵上等兵東條岩太郎歩兵上等兵北山彌三郎一等兵林佐五郎井原秋藏

上海役　歩兵上等兵板東安一

其他海軍三等兵曹出口銃砲兵一等兵一芝林吉

一宮用水嘉永六年の完成にして井上彌藏なる人時の公儀に上願以西用水との衝突あり今の入田村より引水せし其辛苦は今尚ほ村人の美田を見て感謝せる所なり

一宮最初の飛行士として一等飛行士早瀬官太郎出つ昭和十一年一月三十日愛知縣三河郡三谷町沿海飛行中突風に遭ひ墜死せり

村の代表者庄屋戸長を經て

初めて村長を明治二十二年多田賀久太明治三十四年山上豊三郎大正二年河原新七六年多田瀧三郎松島淺次郎昭和七年吉本道次郎十一年河原朝太郎となる

一宮小唄

阿波で名所の數あるなかに是非に行きたい一の宮
難攻不落も何時しか夢に守る砦に虫の聲
城の松風かはりはないがいと〻淋しい時鳥
仰げ尊きお森の主は里を守りの一の宮
流す和讃に鈴の音浮いて順禮可愛や大日寺
行こか歸ろか日はまだ高い茲が思案の太皷橋
梅の谷又赤坂螢流す便りが船戸川

325
228

昭和十二年六月一日印刷
昭和十二年六月十日發行

發行者　一宮保勝會

右代表者　田村濱子

印刷所　徳島市富田浦町字西富田一〇三七番地
高瀬吉

印刷所　徳島市鷲敷町字中洲一三四番地ノ二
財團法人名東郡自治協會
公營印刷所
電話三四二七番
振替徳島六七〇〇番

（非賣品）

終